文化と芸術
文化・芸術研究センターニュースレター
Vol.24
September 2016

CONTENTS

活動報告 SUAC Report
水窪における昔話の採録調査と『みさくぼの民話』 二本松康宏／国際文化学科 2
仮面ライダー・プレミアムアート展 立入正之／芸術文化学科 3
Festa Julina na SUAC 2016 池上重弘／文化・芸術研究センター長／国際文化学科 4
UDプラスinはままつ2016 谷川憲司／デザイン学科 5
映像制作研究プロジェクトの5年間 6
前期公開講座紹介 7
研究事業等一覧 8
インフォメーション 12

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533
●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

Art & Culture

学長
横山俊夫
Toshio Yokoyama

ビチャラ会の夢

今春に本学へ着任してから、45年前の浜松初訪問を折々に思い出しております。それは国学者賀茂真淵の旧跡に佇みたいとの思いからでした。真淵翁には『国意考』というユニークな著作があります。18世紀後半の比較的安定した日本にあって、自国が久しく太平を保ち、しかも閉塞しないための方途を論じたものです。翁によれば、まつりごとは、制度を飾り理論を磨きあげればあげるほど乱れる、それゆえ知に偏することなく、万葉歌が伝えるような「和らぎたる」心を治者と被治者が共有することが大切であると。

その考えは、翁を育てた浜松の風土を知らなくては理解困難と当時考え、今また、仕事の合間に浜名湖周辺や天竜の奥へ足を踏み入れるたび、その思いを新たにしています。ここは、山も川も海も力強く、もし誰かが、天地の間に人が占めるべき位置についてビッグデザインを構想するとすれば、その構図は、人為の集積である大都会で生まれるものとは明らかに異なるものとなるでしょう。翁は「生(いき)とし生(いけ)るものは、みな虫ならずや」と語り、なかでも人は、「鳥獣の目」には、我(が)を張るために知をはたらかせる「もっとも悪しきもの」と映っていると説き、人は「万物の霊長」と信じて疑わなかった当時の儒者たちを驚かせたのです。21世紀の地球社会は、我を張るにハイテクをたのむ人間たちが幅をきかせてやまない。まさか真淵翁はそこまでお見通しであったとは思えませんが……。

さてその現代にあって、多くの大学は、立地する地域にこれまで以上に向き合おうとしています。じつは、20世紀の大戦に勝った国々が謳歌した文化上の覇権が色褪せはじめている今、「普遍」を看板にしていた社会理論や歴史哲学、たとえば近代化論や進歩主義史観についての見直しも足早やです。すなわち、それらの諸説はいずれも始めはごくローカルなものながら、その後の他国での実践すなわち異文化との接触を通じて、しだいに抽象度を増し、体系を整えました……その過程を冷静に眺めれば、それらもまた時代の限定をうけた「特殊」な考えであることが見えだします。平たく言えば、それらにカブレない免疫力が世に広まっているということです。

このような動きに呼応しているのが、地域ならではの学問創出の機運です。そう、かつて真淵翁が「唐の学び」でなく「くにまなび」を勧めたよりもさらに限定された範囲がさしあたり対象となりそうです。文化政策学部とデザイン学部から構成される本学のしくみにあわせて、〝良き文化政策〟や〝良きデザイン〟とはどのようなものかとの問いを掲げれば、まずはこの地域に暮らす人々にとっての議論を、と声があがるでしょう。でも、その人々はどのような歴史や文化に支えられているのか、その地域の他の生き物や環境とのかかわりはどうか、他地域とのつながりはどうか、といった問いも次々に出てきます。仮に、あるデザインが当事者たちを喜ばせたとして、それは他所にも通用するかとの問いも切実でしょう。〝良さ〟をはかる物差し作りは、ローカルなところからの思索を拡げつつ、比較や再調査を繰り返す作業となるでしょう。

たしかに本学にあっては、浜松のモノづくり、県内自治体の文化事業、農山村域の振興などへの協力をめぐって多くの研究実績があり、実践教育も年々盛んです。ただ、それぞれの分野の活動については学内でも互いに詳しくは知らず、地域社会の今昔についての情報共有、研究手法への分野外からの批評、成果の共同評価などはこれからの課題でしょう。じつは、このような課題のための組織「文化・芸術研究センター」が本学にあると知り、新センター長の池上重弘教授とさっそく相談を重ねました。その結果、まずは本学構成員それぞれが、これから本学を拠点にどのような研究を進めたいか、自身の考えを自らの言葉で語り合う集まりを開こうということになりました。

会の名称は？……少し気取ってインドネシア語のビチャラ……それは、思いを言葉にして対話することを表すのみならず、日本語の〝おしゃべり〟にまつわる擬態語にも近い。「うん、ビチャラ会！」早速6月末から8月まで、南入り口そばのガラス張りの「自由創造工房」で開催――地産デザインの説明を英語で練り上げ国際展開を／農山村域の医療福祉を明るくしたい／本学卒業後にデザイン分野で起業した人たちのことを知りたい／本学図書館を魅力あるリサーチパークに／デザインミュージアムやバーチャルアーカイブや学内遊歩道を構想／発達障害者の就労を支援する社会デザイン／文化に軸足のある点で日本唯一とされる本学デザイン学部の将来の研究課題マップ試作――出るわ、出るわ。いずれも共同が不可欠の研究課題。秋には話題提供の呼びかけを学外にも。

夢は、ビチャラ会という〝談林〟の繁る本学が、浜松新名所になることです。そこでは、あたらしいコトを伝える新たな表現も生まれるはずです。真淵翁の場合、それは「我れということの軽き」歌でした。私たちにはどのような心がこもる〝歌〟がふさわしいでしょうか。

活動報告　SUAC　Report

水窪における昔話の採録調査と『みさくぼの民話』

二本松康宏（国際文化学科）

浜松市天竜区水窪町は浜松市の最北に位置する。最奥といってもいい。浜松市の中心市街から水窪へは国道152号線(秋葉街道)を溯ること約65km、自動車で2時間ほどの道のりである。それでようやく水窪の中心街へ到着する。訪ねる集落はそこからさらに峠を越えて18kmも先、というようなこともしばしばある。大学の研究室の窓から眺めれば、北の山なみの遠き果てである。

水窪といえば西浦地区に伝わる田楽が有名である。昭和5年に折口信夫が西浦の田楽を東京に紹介して以来、水窪は民俗の宝庫と謳われてきた。しかし、どういうわけか民間口承文芸、いわゆる昔話については、これまでに本格的な調査はなされていなかった。そこで私たちは2014年度からの3ヶ年計画で水窪における昔話の採録調査を開始した。

1970年代後半から90年代前半にかけて、現在の日本昔話学会の前身となった昔話研究懇話会を拠点として大学のゼミや研究会などによる昔話の採録調査が全国各地で展開し、その調査報告書の公刊が相次いだ。しかし、そうした昔話の調査は2000年頃を境にして著しく困難になってきたといわれる。

原因の一つは「お年寄りの減少」である。「高齢者」は増えたが、なにしろ戦後の高度経済成長を支えて働いてきた人たちなので、昔ながらの昔話を語るような「おじいちゃん」「おばあちゃん」ではないのである。

二つ目は「少子化の影響」。とくに山間地域では極端な少子化が進み、孫と同居する高齢者が減ってしまった。高齢者は自分が幼少の頃に聴いた昔話を自分の孫に語る機会がない。昔話を話す機会がないから、どんどん失われてしまう。

そして三つ目は「学生の志向の変化」である。90年代後半頃から学生がボランティアや社会貢献、地域貢献といった直接的な手応えを実感できる活動を志向するようになり、自分たちの“成果”につながりにくい昔話の採録調査を忌避する傾向が見え始めたという。実際、70年代から90年代前半までの調査では、採録に3年くらいを費やし、報告書の刊行までにはさらに数年を要することが多かった。報告書の刊行は大半の学部生にとっては卒業後のこととなる。あえて悪しざまに言えば、一将功成りて万骨枯るがごときである。そんな調査にイマドキの学生を巻き込むことはできない。

一つ目と二つ目の事情については、どうしようもない。しかし、三つ目の「学生の志向の変化」はどうだろう。本学の学生たちの真摯さとひたむきさは、たぶん特筆に値する。だったら、あとは報告書を“すぐに”刊行すればいい。どうせならちゃんとした出版社から書籍として刊行する。調査に取り組んだ学生たちにとって“見えるかたち”での成果になる。私が書籍というかたちにこだわる理由の一つがそれである。

2014年度の調査では66名の方から話を伺い、昔話、伝説、世間話に分類される105話を記録した。そのなかから学術上の位置付けや記録価値などを精査して82話を撰び、『水窪のむかしばなし』（二本松康宏監修、植田沙来・内村ゆうき・野津彩綾・福島愛生・山本理沙子編著、三弥井書店、2015年3月、A5版、150頁、定価1,080円）として刊行した。2015年度の調査では77名から話を聴かせていただき263話を記録した。そのなかから88話を精選し、『みさくぼの民話』（二本松康宏監修、岩堀奈央・植木朝香・末久千晶・鷹野智永・久田みずき編著、三弥井書店、2016年4月、A5版、158頁、定価1,080円）として刊行している。採録された昔話だけではない。編著者である学生たちによる地域や伝承の解説も添えられている。

書籍として刊行する際に私たちがもっとも腐心するのは「語りのまま」「方言のまま」に翻字することである。

近年では「語り部」を称して小中学校や図書館などで昔話を語り聞かせる活動が広まっている。ところが、そうした活動では子どもにもわかりやすく標準語化され、あるいは再創作された話が大半を占めている。昔話は地域と家庭に伝えられた、まぎれもない文化遺産である。標準語化や再創作は文化財の改竄に等しい。たとえば、重要文化財に指定されている仁王像を、怒り顔が怖いからといって笑顔に彫り直し、裸ではみっともないからといって背広を着せるような所業である。子どもたちに語り継がなければならないのは「語りのまま」「方言のまま」の文化遺産である。再創作された、いわば偽物の昔話であってはならない。可視的あるいは即効的な成果を期待して取り組む「地域の活性化」とは一線を画したうえで、地域と家庭に伝承された、あるいは埋もれていた口承文化財を発掘し、記録し、公開し、そして未来に託す。それが私たちの調査における基本理念である。

そうして刊行された『水窪のむかしばなし』は浜松市の7つの図書館をはじめとして県内では16の図書館に収蔵されている。『みさくぼの民話』は浜松市内の16の図書館をはじめとして県内では29の図書館に収められている。仮に調査報告会やシンポジウムを開催したとしても、来聴者はせいぜい100人か、多くとも200人か。いずれにせよ一過性の聴衆になってしまう。しかし書籍ならば10年先も30年先も、ひょっとしたら100年先でも誰かが読み返してくれるかもしれない。それはたしかなアーカイブである。あえて書籍というかたちにこだわった二つ目の、そして最大の理由はそこにある。

活動報告　SUAC　Report

「仮面ライダー・プレミアムアート展」ワークショップ@浜松市美術館

立入正之（芸術文化学科）

教育普及活動（ワークショップ等）は、近年の博物館（美術館を含む）運営における基幹研究活動のひとつとして、継続的な実施が強く求められる。だが多くの博物館で人員と資金の不足のため、実現していないのが現状である。

これまで日本国内の国公立あるいは大中規模私立の博物館で、館主導の教育普及活動に、学生や社会人ボランティア・スタッフが参加し、一定の成果を上げていることは多数報告されている。しかし大学や学生がその活動全体を主導的に企画・運営した事例は、小規模の私立館以外にはほぼ先例を見ない。

本学は、文化・芸術研究センター主催のもと、浜松市美術館で平成28年夏開催の「仮面ライダー・プレミアムアート展」（会期：7月8日～8月26日）の関連研究事業として、親（保護者）と子のための「ワークショップ」を企画・運営した。その目的は第一に浜松市美術館利用者の鑑賞サポート（質向上）であり、同時に美術館における教育普及活動充実、さらに同館と本学との連携構築であった。

この試みは、「本学特別（イベント・シンポジウム）研究」と「地域連携実践演習授業」から成る、合同プロジェクトの参加メンバーが主体となり企画から運営までおこなった。構成員は、本学の教職員、学外の研究者、文化政策・デザイン両学部さらに全学科全学年所属の30名以上の学生など、総勢約40名である。

また、プロジェクトでは、本学学生の主体的参画と、アートマネジメント教育・研究の実践継続の場となることが期待されたが、博物館学芸員課程学生や芸術文化学科の学生のみならず、文化政策学部とデザイン学部の多領域の学生が参画できたことは、大きな成果と言えよう。本学学生は展覧会や広報活動（本学学生が広報物をデザインした）にも積極的に取り組み、展覧会担当学生によるギャラリートークも経験した。

ワークショップ実現までの4月から7月までの準備期間、学生は毎週水曜日昼休みに全体ミーティングをおこない、さらに適宜ワーキンググループに分かれて活動した。

ワークショップ内容は、幼稚園児、小学校低学年児童、同中学年児童ごとに準備をし、それぞれの学年に適した方法で美術館と展覧会の魅力や鑑賞のポイントをわかりやすく学生が解説した。仮面ライダーは子供たちに身近なテレビ番組のヒーローだが、そのマスクや衣装そして装備品、さらには原作の絵画など、美術館で展示するものとしての精緻さや美しさといった「美術工芸品」としての価値も理解してもらえるよう、少しだけ高度な見方（鑑賞）のポイントを解説した。また、事前告知の広報物は学生がデザインし、広報活動を広範におこなった。さらには、浜松市中心部と浜松市美術館周辺のアート散策地図を、デザイン学部学生のデザインにより製作した。

ワークショップ実施状況は次の通りである。実施日は8月17日と24日の2日で、各日午前と午後に2回ずつ開催した。各回の総勢は100名ほどで、内訳は子供30名、保護者30名ほどと、美術館と本学の運営スタッフである。他学の博物館実習（インターン）学生や近隣高校や他大学教員のスタッフ協力も得られた。全日程では、のべ400名ほどが参加したことになる。実施日は平日だが、夏休中の館内は混雑していたため、特に展示室内では幼い子供たちを学生が誘導する必要があった。回を重ねるごとに、運営はスムーズになっていった。参加者とスタッフ100名ほどが美術館内を動くが、彼らが経験を積むなかで動線を整理し、運営の質を高めていくことができたのは想定以上の成果と言えよう。夏休みの終盤であり、参加する子供たちの学校課題（夏休の自由研究）にも活用できるよう、鑑賞サポートに加えて成果物にも配慮し、学生考案によるオリジナルのライダーベルトを作らせた。

最後になるが、本研究プロジェクトにおいて、参加者（子供と保護者）から満足や感謝のありがたい言葉を予想以上にいただき、実社会に即通用する本学の教育成果を発信できたことと思う。実践にあたり基本的には学生の主体性、独自性を重視し、監修者の役割は助言と軌道修正および事務手続きに極力限定することを心がけた。参加学生の貢献を大いに評価したいが、あわせて、文化・芸術研究センター、地域連携室、企画室、博物館学芸員課程の教職員の尽力の成果であることはまちがいない。さらには、実践の場を提供してくださった浜松市と浜松市美術館の方々の御理解と御協力にも感謝したい。今回は浜松市美術館と本学の初めての連携研究となったが、今後も同館はじめ各館との研究協力そして連携を充実させたい。

活動報告　SUAC　Report

Festa Julina na SUAC 2016

池上重弘（文化・芸術研究センター長／国際文化学科）

本学と日伯交流協会の共催により、多文化共生分野の地域貢献イベントとして、地域の皆さんにブラジルを身近に知ってもらうため、「Festa Julina na SUAC 2016」（フェスタ・ジュリーナ・ナ・スアック 2016）を7月9日に開催しました。フェスタ・ジュリーナは、ブラジルの伝統的なお祭りである「6月の祭り」（フェスタ・ジュニーナ）になぞらえたもので、ブラジル風の飾り付けを施した会場で、参加者が伝統的な踊り「クワドリーリャ」や「リボンダンス」を楽しむイベントでした。

2014年度に開催した第1回に続き、今回は2回目の開催となりました。あいにくの大雨（当日午前は浜松地方に大雨警報が発令）で、昼過ぎまでは客足も伸びず、一時はどうなることかと心配しましたが、雨が上がった午後からは日本人、ブラジル人合わせて約200名の来場がありました。

さて、なぜ本学がこのフェスタ・ジュリーナを開催するのでしょうか。そこには単なる文化交流を超えた意図があります。ブラジル人をはじめとする外国人の定住傾向が強まるなか、日本で生まれたり、育ったりした第2世代の子どもたちで本学に進学する子どもが着実に増えています。こうした定住外国人学生は東海地方の大学では珍しい存在ではなくなりつつありますが、毎年数名の定住外国人学生が入学してくるのは本学の大きな特色のひとつです。フェスタ・ジュリーナの企画運営に携わった学生実行委員会も、18名のうち10名が外国にルーツを持つ学生たちでした。

定住外国人の保護者のなかには、子どもたちを日本の大学に進学させたいと考える人も増えていますが、保護者たちは日本の大学で学んだ経験はなく、ロールモデルとなる定住外国人学生の数も現時点ではまだきわめて限定的で、保護者たちには大学に進学した同胞の若者の姿はあまり見えていません。

そこで、フラジル人にとってなじみ深く、なおかつ子どもたちが主役となって参加するフェスタ・ジュリーナを本学で開催することで、県西部に住むブラジル人の子どもたちとその保護者が本学に足を運び、本学の学生たち、とりわけブラジル人学生たちと交流する機会を設けることにしました。本学の日本人学生や地域の日本人にとってはブラジル文化の一端を知る機会となるし、ブラジル人の子どもたちや保護者にとっては、日本の大学に足を運び、施設を見学したり、本学に在籍するブラジル人学生たちと触れ、その経験を聞く絶好の機会となるようにしました。

具体的には、本学に在籍するブラジル人をはじめとする定住外国人学生たちの案内で、英語、ポルトガル語、スペイン語、タガログ語、中国語で解説する「キャンパスツアー」を実施しました。実際に多言語キャンパスツアーの需要があったのはポルトガル語とスペイン語だけで、フィリピン人や中国人の来場者がありませんでした。この点は今後の広報の大きな課題です。

楽しい行事の機会に大学進学を果たしたロールモデルとなる定住外国人学生たち（ブラジル人、フィリピン人等）と直に接する機会を設けることで、日本の大学を知ってもらい、進学に向けた情報提供とともに進学の動機付けを図ることを目的としたフェスタ・ジュリーナ。このイベントは外国人の定住化が進み、大学進学を希望する外国人の子どもや保護者が増加している現況を踏まえた、本学の特色を生かした地域貢献活動となりました。

リボンダンス

ポルトガル語でのキャンパスツアー

活動報告　SUAC　Report

ＵＤプラス in はままつ2016

谷川憲司（デザイン学科）

静岡県、浜松市、静岡文化芸術大学の三者が共同で主催するイベント「UDプラス in はままつ2016」として、8月27日（土）にトーク＆セッション「UD＋Music」が、翌8月28日（日）に「展示体験会」が開催された。

・UDプラス in はままつ

ＵＤに関する新しい製品や考え方を紹介し、プラス志向のＵＤの魅力・可能性を発信してＵＤへの新鮮な関心を呼び起こしたいとの狙いから、静岡県、浜松市、静岡文化芸術大学と地域産業界の産官学連携で2014年に「ＵＤプラス in はままつ」を開催し今年は第３回目となる。テーマは第１回より地域の産業でもある「パーソナルモビリティ」を取り上げているが、さらに子どもからお年寄りに広く楽しめるように、もう一つの地域の産業である「楽器・音楽」を新たに加えた。

・トーク＆セッション「UD+Music」

8月27日に静岡文化芸術大学講堂にて開催されたトーク＆セッション「ＵＤ＋Music」は、音楽を通じて様々な人と共に楽しむ空間を体感しながら、音楽や楽器とＵＤの可能性について考える全員参加型のシンポジウムとした。子どもからお年寄りまで多彩な140名の参加者を迎えた。

セッション１のテーマは、「『共遊楽器』の取り組みとその可能性」。慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科研究員の金箱淳一氏を講師に迎え、聴覚・視覚に障害を持つ人も一緒に感じて楽しめる「共遊楽器」についての取り組みや実例が紹介された。

講演会に先立って、小学生を対象に金箱氏の考案した手をたたくと光る「クラップライト」のワークショップを開催し、市内26名の児童が「クラップライト」作りに参加した。児童達は自分で作ったクラップライトを手に「共遊楽器」のデモに加わった。

セッション２は、静岡文化芸術大学学生達によるプレゼンテーション。４月に発足したＵＤプラスＭＵＳＩＣプロジェクトで「誰もが楽しめる音楽」に取り組んできた12名の有志学生が、２つの作品を発表した。

「モニカム」は、木琴や鉄琴を仕込んである三角形のパーツを付け替えて好きな音色を楽しむことができる楽器。「リズカ」は１６枚のカードで、引き当てたカードに印刷されたリズムを鳴らして合奏が楽しめる音楽ゲーム。「リズカ」のリズムを「モニカム」を使って演奏する実演には、会場の子供達も加わって楽しく紹介された。

セッション３は、ドラムサークルファシリテーター協会理事長である橋田ペッカー正人氏による「UD@beat」。参加者全員がペッカー氏のリードで様々な打楽器を手にリズムを奏でているうちに、いつの間にか会場が一体となったのは感動的であった。

・「ＵＤ＋展示体験会」

8月28日（日）、浜松市ギャラリーモール「ソラモ」にて「ＵＤ＋展示体験会」が開催された。

パーソナルモビリティ系：８社＋１大学（静岡文化芸術大学）と音楽系：２社の合わせて１１者が参画。誰もが快適に移動できるツールや、誰もが楽しめる楽器などが展示された。真夏の会場であったが、幸いにも曇り空と穏やかな風の吹く過ごしやすい１日で、4,200人の来場者で賑わった。また試乗コーナーでは６台のパーソナルモビリティが提供され、239人の試乗体験者があった。

静岡文化芸術大学谷川憲司研究室からは、サンアーティスト・ヤマハ発動機とのコラボレーションで製作した「doop」を出展し試乗会にも提供した。試乗者から「コンセプトが明快」「前輪駆動/折りたたみの方式が斬新」「単純な機構からなる外観がかっこいい」などの評価を得ることができた。

会場では、前日に引き続いてペッカー氏のドラムサークルの実演が２回行われた。打ち響くリズムに、集まった観客も演奏に加わって盛り上がり、楽しい時間を共有した。

また、ヤマハ㈱とヤマハ発動機㈱が共同開発した、音を奏でる電動アシスト車いす「＆Ｙ（アンディ）01」の実演パフォーマンスも行われ、音と動きのあふれたイベントになった。

二日間のイベントを通じて聞こえてきた感想で「楽しかった」という声が多かったことに手応えを感じている。超高齢社会として世界に先駆けている日本において、ＵＤの実際的な活用が重要な意義を持つとともに、産業として重要な柱になることが期待される。今回まで３回の「ＵＤプラス in はままつ」を通して、ＵＤの新しい可能性や魅力を少しでも感じていただけたとしたら幸いである。今後はさらに視野を広げ、ＵＤを基軸として社会・産業の活性化につながる展開を図っていきたいと考えている。

「モニカム」のプレゼンテーション（2016.8.27）

映像制作研究プロジェクトの５年間

文化・芸術研究センター

■プロジェクトのスタートまで

「映像制作研究プロジェクト」は文化・芸術研究センターの主催事業として2011年度から5カ年にわたり実施された。名称は「研究プロジェクト」ながら、その内容は学生が映像作品の制作法－テーマ選定、企画、脚本作り、撮影、演出、編集に携わり、自らの作品を完成する－を学ぶ「講座」である。この「プロジェクト」は、2010年4月に文化・芸術研究センター長に就任された三枝成彰先生の「思い」からスタートしている。高名な作曲家である三枝先生は、学生たちに「自ら作品を作る経験」を積み、「物事、作品をプロデュースすること」を学んでほしいと思っておられたようである。この「三枝プラン」は早期に具体化され、三枝先生の実弟で、NHKでドラマ制作・演出に携わり、その後「MISTY」（1997）、「オリヲン座からの招待状」（2007）などの映画を監督された三枝健起氏を講師として招聘、年10回程度の出張直接指導で映像作品を作るプロジェクトが始まることとなった。

■初年度（2011年度）の成果と課題

2011年4月に2回の学生向けガイダンスを開催、会場の小講義室には溢れるほどの学生が集まり、映像制作に対する学生の関心の高さが窺われた。翌月の初回に参加した学生は約50名、想定の倍以上の学生が集まったことで、進め方を再検討し、12～13名のグループを4つ作ることとする。この時点では撮影機材が揃わず、映像制作の基礎は三枝健起先生にご指導を頂くとして、作品制作に向けての具体的な活動はグループ内でミーティングを重ねながら進めてもらうほかはなかったが、学生たちのモチベーションは高く、脚本の作成、キャスティングなどの作業は着々と進み、撮影機材が揃った11月頃からは、大学構内や近隣の公園などを使っての撮影が始まる。大学が冬休みに入った12月の下旬に各グループの撮影予定が集中したため、三枝健起先生には年末に浜松までお越し頂き、3日間付きっ切りで撮影のご指導を頂いた。屋外での撮影が多く、厳しい寒さの中での撮影指導となった。

初年度は、1グループが制作を断念し、3つの作品が完成した。どれもわかりやすいドラマ作品で、ドラマ制作の専門家である三枝健起先生のご指導もあり、それなりに見られるものであったと思う。一方で初年度は撮影・編集に十分な時間がなかったこと、各グループが12～13名となり、マンパワーは十分ながら「業務分掌」によって進めるほかなく、ほとんどの学生が制作過程の一部に関わる、という形になり、「自分の手で作品を作る」という目的に十分に叶わなかったのではないかという反省点も生まれた。

■個人制作とグループ制作～2年目の変更点

2年目の2012年度は20名程度の学生が参加した。撮影機材は揃い、すぐに作品制作に取り掛かることができるため、新たに「個人制作」に取り組んでもらうことにした。他の学生のサポートを受けながらも脚本、撮影、編集等一連の映像作品制作の過程をすべて自分の手で行う経験を積んでもらうことが目的である。「5分程度のショート作品」ということで、創作のヒントとしたのが井伏鱒二の「点滴」という作品（『井伏鱒二全集』第13巻所収）である。「連続した水の滴り音」をテーマとした小文で、そのものを映像にするのではなく、「点滴の音をモチーフとして、自由にストーリー展開を考え、それを映像作品にすること」、「点滴の音をしっかりとる」ことを課題とした。この個人制作課題は最終年度（2015年度）まで毎年続けられ、点滴音をモチーフに、学生が自由に展開した内容は多彩で、面白い作品が多い。2012年度はグループ作品も3作品完成し、かなり充実した内容となった。映像制作に対する意識と経験値の高い1年生が多く参加したのもこの年の特徴といえる。

■3年目以降の状況

2013、2014年度は一転して参加学生が各年5名程度で、グループ作品は2013年度が1本、2014年度は完成に至らず、3年目以降、プロジェクトはやや低調となった。参加学生数が減少し、どのように進めるべきか、三枝健起先生とともに最も悩んだ時期である

2015年度はこの年から始まった「地域連携実践演習」のプログラムに組み入れ、10名の学生が参加、前期中は非常に熱心に活動が続けられたが、目標だった夏休み中の作品完成が叶わず、結局作品の完成は後期の終盤にずれ込む。単位取得が可能となったことで、学生のコミットメントは大幅に改善したが、学生は全員1年生で、キャスティングやロケハン（撮影場所の選定）などが予定通りに進まなかった。指導者がいるとはいえ、学生の自主的な創作活動が円滑に進むためには、1年生だけでなく、経験のある上級生も含めたバランスのとれたグループ構成が適当であることもわかってきた。プロジェクトは5年目を迎え、新たな形を検討する時期に来ていた。

■プロジェクトの遺産を次世代のSUACに繋げる

ご指導を頂いた三枝健起先生はドラマの制作・演出が専門で、①ストーリーを映像に展開するに当っては「絵コンテ」を描くこと、②シーン、カットの意味をよく考えること、③“絵”に気が行きがちだが、映画は“音”が大切、などのポイントを繰り返し指導された。学生の受容レベルに差があり、どこまで消化できたかわからない面もあるが、映像作品を企画し、作品として完成させることの面白さと難しさを伝えることはできたのではないか。一方で技術が未熟なままに“処女作”から複雑で込み入ったストーリーを作り上げようとするため、適切な映像化が非常に困難、あるいはどうすべきか解決策がみつからない、ということも多かったように思う。

映像作品の制作は学部の専攻に関わらず、在学中の研究活動（調査、取材等）や卒業後の様々な仕事の場でも応用可能な非常に実用性の高いスキルである。撮影機材や編集ソフトも進化し、誰もが手軽に映像作品を作れる時代なればこそ、しっかりとした基礎の上に経験を積むことが大切となる。このプロジェクトは2015年度をもって終了し、2016年度からは地域連携実践演習の「地域PR番組制作プロジェクト」などに引き継がれている。学生自らの情報発信として映像という表現法の有効性は今後益々高まるであろう。5年間の遺産を次世代のSUACに繋げていきたい。

（文責：冨田晋司／地域連携室）

活動報告　SUAC　Report

（平成28年度前期公開講座）

「リオデジャネイロ大会から東京大会へ」開催報告

2016年度の前期公開講座はオリンピック・パラリンピック・リオデジャネイロ大会の開催に先立ち、「関連講座」として、2016年の開催国・ブラジルの社会事情や次回2020年開催国である日本のスポーツ事情、1964年の東京オリンピック、さらにはオリンピックの「文化プログラム」など、オリンピック・パラリンピックに関わる多彩なテーマの講座となりました。

1．「リオデジャネイロ大会とブラジル事情」（2016年7月9日）
イシカワ エウニセ アケミ（国際文化学科）

■ブラジルのスポーツ事情

ブラジルはサッカーのイメージが強いが、サッカーはこれまで男女ともオリンピックの金メダルがない。ヨット、バレーボール、柔道、バスケットボールなどがメダルの有力種目。ブラジル社会は貧富の差が大きく、階層によって取り組むスポーツも異なる。最上層はF1や乗馬、ヨットなど、中流層はバレーボール、テニス、水泳、誰でもできるのはサッカーと陸上競技。学校にスポーツをやる十分な施設がなく、テニスや水泳は民間のスポーツクラブに入らないとできない。スポーツで社会階層がみえてくる。

■ブラジルの人種、教育事情、貧富の差

黒人が多い印象があるかもしれないが、2010年の国勢調査では白人が47.7%、黒人7.6%、パルド（褐色）43.1%である。但し人種に対する意識はアメリカや日本とブラジルとでは随分違う。人種が何かは基本的に自己申告、アメリカでは黒人とみられる人もブラジルでは白人あるいはパルドとみられる。ブラジルは移民の国で、様々な人種がいるが、意識の上で白人が最も上とみられている。

25歳以上で大学卒は約11%、一方で約50%が「義務教育中退」で、半分ぐらいの人はまともな教育を受けていない。スラム街に住んでいる人の多くは十分な教育が受けられない。貧富の差は大きく、46%が月収4万円以下、月収20万円以上は全体の5%ほどで、誰もが自動車やエアコンを買えるわけではない。オリンピックの入場料は人気種目を中心に高めで、一部の人しか会場に足を運べない。人びとはオリンピックに対しては概ね好意的だが、「つぎ込むお金があるのなら、教育、医療に投資すべき」という意見もある。教育事情、貧富の差の状況をみればそのような意見が出るのも当然かもしれない。

2．「オリンピック・パラリンピックの過去→2020年TOKYO→未来」（2016年7月16日）

第1部　講演　玉木正之（スポーツ評論家・招聘客員教授）

我々日本人の多くは意外とスポーツのことを何も知らない。バレーボールの意味、フットボールがなぜサッカーと呼ばれるのか、野球の左投手は何故「サウスポー」なのか、サッカーやラグビーでオフサイドは何故反則なのか、など答えられる人は少ない。日本人は学校で「体育」は学ぶが「スポーツ」について何も学ばない。体育は“physical education”でスポーツを利用した教育。体育とスポーツは全く別の概念である。日本は明治期にスポーツを外来文化として輸入し、その後の軍国主義の中で身体を鍛える「体育教練」に繋がって、スポーツを体育として理解（誤解・曲解）した。さらに1964年の東京五輪でスポーツ＝体育という認識が定着、翌年、開会式の日（10月10日）が体育の日に制定された。高度経済成長期はまさに「体育の時代」。体育会は長幼序列・上意下達の上下関係で実力主義のスポーツとは相反する非スポーツ的組織だが、体育会系のサラリーマンが高度成長を担った。

時代は変わり、日本でも体育会以外のスポーツクラブが充実、現在ではスポーツクラブ中心の競技（水泳、体操、卓球、サッカーなど）が躍進している。社会においても体育会系でない、「スポーツ・インテリジェンス」を備えたビジネスマンとサポートするコーチによるプロジェクト・チームが牽引するようになりつつある。「体育の日」を「スポーツの日」に名称変更する動きが出ている。スポーツに対する理解を進め、日本のスポーツの発展のためには是非とも必要なことと思う。

第２部　座談会　玉木正之・溝口紀子（国際文化学科）

1964年の東京オリンピックの開会式、競技や思い出に残る名選手、当時の東京の街の様子、閉会式などをテーマにトーク（市川崑監督「東京オリンピック」（1965）の映像などを資料として）

3．オリンピック・パラリンピックの「文化プログラム」と今後の文化政策～「文化芸術立国」実現に向けた「レガシー」をどのように形成するか（2016年7月23日）
片山泰輔（文化政策研究科長）

オリンピックと文化芸術との関係は深く、近代オリンピックの初期は万国博覧会の一部として開催され、その後「芸術競技」が実施されていた時代（1912～1948）もあった。1964年の東京大会では美術、芸能の分野で様々な芸術展示が行われた。前回2012年のロンドン大会では2008年から2012年の4年間にわたり、総数17万件超の文化プログラムが英国全土1000か所以上で開催されている。2020年の東京大会ではロンドン大会を上回る文化プログラムの充実が約束されている。

日本では20世紀まで文化や芸術は教養、趣味、娯楽として、余暇時間に行うもの、不要不急のものと位置付けられてきた。しかし1995年の阪神淡路大震災の救援活動、復興活動の過程で、様々な文化芸術イベントが民間の自主的な動きとして展開され、文化芸術が果たす役割が再認識された。2001年制定の「文化芸術振興基本法」には文化や芸術の公共性、国民の権利としての文化権が規定されている。文化芸術は人びとの創造性を育み、世界の様々な文化芸術に対する理解は国際平和にも繋がるものである。

東京大会を契機とする文化プログラムを一過性のものに終わらせることなく、2020年以降の日本全体の発展に繋がる「レガシー」になるような基盤整備を行うこと、とりわけ文化芸術を仕事とする専門職（芸術家だけでなく、企画・制作、技術、運営に携わる人材を含めた専門職）の育成による新たな雇用や産業の創出などがポイントとなる。

今後「文化力プロジェクト」として20万件のイベントの開催が見込まれ、2020年以降も継続していく予定である。文化プログラムは日本全国で展開されるが、文化イベントが地域の「レガシー」になるためには、資金調達と人材育成を長期的に行う「自立経営型」であることが望まれる。また地方自治体の文化政策の推進体制としては、英国で行われているようなアーツカウンシル制度の導入が試みられており、静岡県の取り組みも文化庁の支援を受けて進められている。

2020年東京大会の文化プログラムを契機に日本社会における文化の在り様が大きく変化する可能性がある。打ち上げ花火を上げて、2020年以降は何も残らない、というようなことのない様、適切に進めていくことが求められている。

（文責：冨田晋司／地域連携室）

2015年度　研究事業等一覧

＜特別研究＞

特別研究は毎年、学内公募に応じて教員が研究テーマを申請、学内の審査を経て採択を決定します。研究の期間は1年または数年に及び、テーマによっては専門分野の異なる教員、その他の研究者が共同で研究を行うこともあります。特別研究の研究成果は本学の研究紀要や研究成果発表会、学会での発表等を通じて広く情報発信するとともに社会へ還元しています。

No.	研　究　名	代表者		目 的 及 び 内 容
		学科	氏名	
1	旧東欧地域における文化遺産の保全と利活用に関する研究	文化政策	四方田雅史	国境変更やEU統合によって揺らいできた国民国家のあり方や社会主義やナチ支配といった負の歴史を反映して文化遺産を取り巻く環境は先進国と旧東欧で異なる。その文化遺産を取り上げその保全と利活用を研究する。
2	視線計測技術を応用した製品デザインと消費者行動の研究	文化政策	小杉　大輔	本研究は、アイトラッカーを用いた、多様な認知実験の集成研究である。主に、製品デザインの評価と商品購買時の意思決定過程に焦点を当てる。また、応用研究として、実店舗におけるマーケティング研究も実施する。
3	SUACの研究活動15年の成果	芸術文化	高田　和文	2015年に開学15周年を迎える本学の研究活動の成果を総括し、報告書の形で刊行する。報告書は、３つの重点目標研究領域を中心としながら、その他全ての研究活動、イベント・シンポジウム事業等を含めたものとする。
4	「国際化」の視座からの日本古典芸能照射－第１回フィリピン大学国際研究センターとの連携研究10周年記念事業－	芸術文化	梅若　猶彦	１．古典芸能が有する（例外もあるが）歴史に裏支えされた身体的及び文学的な型、様式、形式、手法等の分析と整理。またそれらが近代以降に与えた影響。２．古典芸能の制度研究/古典芸能の歴史研究。３．外交媒体としての古典芸能。４．創作能の実現。５．上記4項目を踏まえ、2014年開催の国際会議「日本の文化外交における交流媒体としての能」の報告書の製本化。６．上記1～5の成果、発表の場としてシンポジウム開催。
5	文化芸術による地域資源発信事業の研究（その３）	デザイン	磯村　克郎	多岐に渡る地域住民の活動と芸術文化が連携した地域資源の発信・発展プロジェクトの実施を通して、芸術文化の他分野への波及力と、現場でのマネジメント、デザイン人材育成の可能性を検証する。
6	専門科目への英語教育導入に関する研究	デザイン	高山　靖子	SUACの国際人教育の充実を図るためH24年～H26年の研究において「専門科目に対しての実践的な英語教育プログラムの実施と学習ツール（教科書）の作成を行った。H26年度中にデザイン学部の新カリキュラムが決定され、専門科目の英語プログラムが本格運用されることとなったため、本研究では、このテキストを基にさらに実験プログラムを試行し、デザイン教育機関で広く活用されるよう一般化への研究を深める。
7	劇場文化研究「地域の公立文化施設における基本計画と実施設計の現状と課題」	芸術文化	永井　聡子	劇場法の制定後、地域における「文化」「芸術」の位置づけは、劇場建設に重要である。そこで行政と連携して、基本計画と実施設計との現状と課題を抽出、日本における公立文化施設の役割を検証することが狙いである。
8	フランス地方都市における日仏文化交流・受容の諸相考察	国際文化	石川　清子	地方都市ボルドーを例に、フランスと日本間の文化的・芸術的交流がいかに行われ、また相互の文化・芸術はいかに受容されているかを、市の後援つきアートフェスティバル、近郊の日本人会活動の現況調査から考察する。
9	浜松におけるフェアトレード・シティ運動の可能性調査	国際文化	下澤　　嶽	浜松市におけるフェアトレード・シティ認定の可能性、認定後の効果についてイギリスと国内の事例調査をし、浜松市の消費者教育推進法に基づく諸活動、また関係する市民活動団体に資する提言を行う。
10	階級・文化・教育の視点からのアメリカ文学研究－ソール・ベローのホロコースト小説と遠藤周作の隠れ切支丹小説の比較－	国際文化	鈴木　元子	ユダヤ系アメリカ作家ソール・ベローのホロコーストから逃れてアメリカに移住したユダヤ人（≒隠れユダヤ教徒）を描いた小説と、日本の遠藤周作の長崎における隠れキリシタンを題材にした小説を比較研究する。
11	アーネスト・ゲルナーの思想・哲学とナショナリズム論の基礎研究	国際文化	馬場　　孝	アーネスト・ゲルナーの思想、哲学の全容の解明と、彼のナショナリズム論の批判的継承を研究目的とする。多文化共生社会の可能性を考察する上で、ゲルナー理論のもつインプリケーションも研究の視野に収めたい。
12	アジアの相互理解のための国際理解教育	国際文化	崔　　学松	近年、アジアにおいて経済分野の相互依存は急速に進んでいるが、このことが相互の信頼醸成には結び付いていないという課題が浮き彫りになった。今回の研究は、これらの観点からアジアを多角的な視点から分析する。
13	人口減少時代における地域のあり方を考える	文化政策	森　　俊太	人口が減少し高齢化率が高まる時代における地域の政策課題を、社会学、都市計画、行政、農業・食品、経済、教育・福祉、図書館の視点から取り上げ、複数の視点から、これからの社会の望ましい在り方を考える。
14	戦後日本における放送と地域農業の関係性をめぐる考察	文化政策	加藤　裕治	戦後日本において、NHKと地域農業関係者との間にあった特殊制度（地域の農業普及員や生活改良普及員が中心となり放送に関わったRFD通信員制度）の詳細を調査する。それにより放送と地域農業の関係を明らかにし、今後の放送と地域の関わりの可能性を探る。
15	浜松市の中山間地域における空き屋の文化資源的価値についての研究：浜松市天竜区を事例として	文化政策	舩戸　修一	浜松市の中山間地域における空き屋ならびにそこで私蔵されている古文書についての実態を把握するとともに、その有効な利活用について考察する。

No.	研　究　名	代表者		目的及び内容
		学科	氏名	
16	デジタルファブリケーションの活用によるデザイン人材の育成と地域貢献	デザイン	伊豆　裕一	デジタルファブリケーション設備の導入と活用による、新しいモノづくりに対応したデザイン人材の育成と同設備を地域における人材育成、および産業支援等に活用することによる地域貢献。
17	ユニバーサルデザイン講義録・演習記録資料化研究（講義記録原稿作成）	デザイン	永山　広樹	これまでの22カ年に於いて、本学ユニバーサルデザイン講義・演習記録について研究を行い原稿作成と編集等から記録・資料化としての成果を見ることができた。 本年度は、記録・資料の原稿を冊子化を図り資料図書としての体裁を整え必要部数の印刷と書籍への検討研究を実施する。また、資料図書としての内容を充実させるため冊子印刷以前に試冊子を印刷する。
18	「発達障害者のための自動車運転支援デジタル教材の検討（第二次）」	デザイン	宮田　圭介	発達障害者は法律上、自動車運転免許取得に問題はなく、大多数は運転技能も問題ないが、障害のために認知判断の難しい運転状況があるので、安全運転できるよう判断能力を支援するデジタル教材のデザインを行う。
19	わが国の芸術団体の組織特性に関する研究	芸術文化	高島知佐子	本研究は、わが国の芸術団体の組織特性を官僚制組織、ボランタリー組織、専門職組織の視点から体系的に整理し、組織規模、発展段階別にそのマネジメント課題をあきらかにすることを目的とする。
20	海外の日本系団体による対外文化政策－パリを舞台にしたネットワークの解明－	芸術文化	松本　茂章	日本の対外文化政策研究を続けてきた。その流れから、2015-17年度の3年間を用いて、パリで活動を続ける日本系の団体が、どのような人的、組織的、あるいは資金的なネットワークを構築してきたのか、について解明する。
21	内受容感覚と感情インタラクションの研究	デザイン	長嶋　洋一	認知心理学の領域で注目される「内受容感覚」に関連して、生体センシングとバイオフィードバックによる感情インタラクションについて研究し、福祉工学/エンタテイメント科学への応用を目指す。
22	多文化共生の地域課題への取り組みをめぐる総括的研究	国際文化	池上　重弘	平成26年度に実施した磐田市外国人集住団地での実態意識調査の結果を詳細に分析するとともに、多文化共生の地域課題に対するこれまでの取り組みを振り返り、多文化共生分野での本学の研究上の貢献を総括する。
23	我が国の芸術団体・文化施設等の経営改善と公共政策のあり方２	芸術文化	片山　泰輔	SUAC芸術経営統計データ及び、文化庁補助事業の実施を通じて得られる各団体のミクロ情報をもとに、我が国の芸術団体・文化施設等の経営状況及び、それに対する国や地方自治体の公共政策の在り方を検討する。
24	地域産業活性化に向けたUD研究拠点整備と活動の展開	デザイン	小浜　朋子	人の多様性に着目して新しい価値を生み出す次世代型ユニバーサルデザインのあり方を探求するとともに、地域との連携による研究活動を進め、ユニバーサルデザインを機軸として地域の活性化を図る。

＜イベント・シンポジウム＞

地域への情報発信、地域貢献などを目的に本学主催によるイベント、シンポジウム等を開催しています。学内公募に応じて教員が申請、学内の審査を経て採択を決定します。イベント等の企画・運営は担当の教員が中心となって行い、多くのプロジェクトに本学学生が企画、運営のスタッフまたは参加者として加わっています。

No.	イベント名	代表者		実施内容（実績報告書）
		学科	氏名	
1	めばえの親子スポーツ（じゅうどう）教室	国際文化	溝口　紀子	2015年11月8日に浜松市武道館において、今回で５回目となる「めばえの親子スポーツ教室を実施した。今回は、ラグビーのW杯開催を意識して、ラグビー協会とのコラボレーションにより地域スポーツを盛り上げた。（参加者300人）
2	浜松で考える多文化共生のフロンティア	国際文化	池上　重弘	2015年10月17日に、本学講義室において学術シンポジウム「浜松で考える多文化共生のフロンティア」を実施した。担当教授からの趣旨説明、講師の基調講演、登壇者４人の大学教員による報告の後、講師と担当教員を交えた登壇者同士による討論や会場との全体討論、質疑応答を行った。（参加者120人）
3	イタリア仮面劇の上演とワークショップ	芸術文化	高田　和文	2015年10月23日に、本学講堂においてボローニャの劇団によるイタリアの伝統的な仮面劇コンメディア・デッラルテの公演を実施し、学生や地域の市民に無料で公開した。（参加者210人）また、翌24日には、万年橋パークビルにおいて、NPO法人と協力して仮面劇の俳優によるワークショップを開催し、本学の演劇サークルや地域の劇団俳優、近隣の高校の演劇部員などが参加した。（参加者19人）
4	浜松市の中山間地域再生と地域外人材の役割：大学・大学生・浜松山里いきいき応援隊による活動を振り返って	文化政策	舩戸　修一	2015年12月16日に、本学の講堂及び大講義室において、浜松市との共催でこれまでの学生の取り組みを市民に発表し、大学や大学生、若者による中山間地域の再生の可能性を示す、浜松･中山間地域づくりシンポジウム『まちなかリレーション市民交流会議」を開催した。（参加者200人）
5	ユニバーサルデザイン絵本コンクール2015及び展示会	文化政策	林　左和子	絵本を通してユニバーサルデザインや多文化共生などを考える機会を学生に提供するため、ユニバーサルデザイン絵本コンクールを開催し、小中学生以下の子供部門、高校生、大学生、一般の各部門を設定して全国に募集した。応募総数は59点、2015年10月21日に審査委員会、11月14日に表彰式を実施した。表彰式には、UD研究賞のほか、各部門の優秀賞、佳作の入選者のうち、30人が参加した。展示会は、２月15日から18日に浜松市役所1Fロビー（見学者1,200人）と2016年３月20日､21日に大崎ゲートシティホール（見学者150人）で開催。

No.	イベント名	代表者		実施内容（実績報告書）
		学科	氏名	
6	地域とメディアの関係性を展望する－戦後日本の地域と放送をめぐる考察から－	文化政策	加藤　裕治	平成26年度及び平成27年度の特別研究の研究成果の報告会として、2016年１月26日に本学講義室において開催した。報告会では、戦後日本の地域とメディアに関する歴史的研究の成果を地域に発信しただけでなく、浜松地域のマスコミ関係者からも報告があり、地域連携としても成果があった。（参加者85人）
7	第２回SUAC-SPAC学術-芸術連携研究事業<対話式シンポジウムの開催と現代劇の上演>	芸術文化	梅若　猶彦	本学（SUAC）と静岡県舞台芸術センター（SPAC）との双方向の人的交流及び事業連携による学術･芸術･教育面の向上を目指し、学生のインターンシップ（夏季）を実施したほか、11月22日には、講堂においてSPACの宮城芸術監督が指導し、本学の学生が参加した現代劇の上演や「伝統文化と芸術-仮面を手がかりに」と題したシンポジウムを開催した。（現代劇及びシンポジウムの参加者130人）
8	静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2015	芸術文化	梅田　英春	①2015年５月29日に本学講義室において、浜松市文化振興財団から講師を迎えて、「浜松の音楽イベントを知る、学ぶー課題と可能性、文芸大の役割とは」を実施した。（参加者42人）②６月８日には「シリーズ音楽の力」として「沖縄のうた～命薬としての音楽　沖縄音楽レクチャーコンサート」（参加者240人）を本学講堂で開催。③10月17日、浜松市天竜区龍山の森林文化会館にて「パイプオルガンのレクチャー＆コンサート「風と川と音と」を開催（参加者140人）。④11月13日には「バンバン！ケンバン♪はままつ2015」として、自由創造工房及び講堂においてチェンバロとピアノの演奏会（参加者190人）を開催。⑤2016年３月20日には「シリーズ音楽の力」の第２弾となるピアノ・レクチャコンサート「抗う～時代に抗う作曲家たち　芸術というもう一つの武器」を開催。（参加者180人）
9	内山咲子の太宰治の小説をテーマとしたイラストレーションポスター及び装幀展	デザイン	佐井　国夫	2015年７月４日～12日に本学ギャラリーにおいて、内山咲子氏のイラスト作品の展覧会を開催した。また、７月５日には、内山氏を招いて「世界でひとつ、オリジナルブックカバーをつくろ！」と題したワークショップを実施した。
10	ユニバーサルデザイン・プラスin浜松　2015	デザイン	谷川　憲司	付加価値をプラスした先進のユニバーサルデザインによる製品・サービスを紹介するイベントとして、「ＵＤプラスシンポジウム」を講堂において2015年８月21日に実施し、翌22日には、展示体験会（ギャラリーモールソラモ）を実施し、UDの魅力・楽しさを発信した。
11	錯視模様を利用した、二次元平面と三次元立体の対応	デザイン	天内　大樹	「錯視模様を利用した、二次元平面と三次元立体の対応」として、探求型ワークショップを学内において2015年９月26日（参加者14人）、2016年２月20日（参加者６人）の２回開催、静岡大学情報学部のテクノフェスタを会場とした体験型ワークショップを2015年11月６日（参加者100人）に開催した。
12	イブニングレクチャー2015	デザイン	中山　定雄	2015年12月９日に本学講義室において、経済評論家の勝間和代氏による「イブニングレクチャー2015秋・私たちのくらしと経済」を開催した。また、2016年１月18日には、インテリアデザイナーの橋本夕紀夫氏による「イブニングレクチャー2016新春・日本の伝統を生かしたデザイン」、２月８日には戦略デザインコンサルタントとして、日本のデザインを主導してきた中西元男氏による「イブニングレクチャー2016春・デザインの教育、役割、新時代へ」を実施し、浜松発のデザインムーブメントの発信、大学のプレゼンスのアピール、市民と学生の交流を創出した。
13	TDW東京デザインウィーク2015学生展	デザイン	中山　定雄	東京の明治神宮外苑で2015年10月30日～11月３日に行われた「東京デザインウィーク2015アジアアワード学校作品展」に出展し、世界各国から参加した54校のうち、学校賞部門の準グランプリを獲得した。同イベントでは、約２万人（入場者11万人）が本学の作品（ブース）を訪問。日本テレビの情報番組「スッキリ！」（全国放送）の密着取材を受けるなど、大学の広報にも大きく寄与した。2016年２月には、学内で実施された「メディアデザインウィーク」に受賞作品を展示し、市民や学生にも紹介した。
14	「ワヤン－インドネシアの人形芝居－」展	芸術文化	立入　正之	2015年12月11日から2016年１月13日までの間、本学のギャラリーにおいて、教員の研究用コレクションのワヤン人形（約50体のバリ島影絵人形）のほか、上演の舞台や楽器の展示、更には人形製作のための道具やその製作過程がわかる人形やパネル、上演の様子を紹介した。また、12月12日には同じくギャラリー（展示会場内）において、実際にワヤン人形に触れることができる、ワヤン・ワークショップ「ワヤンを知ろう、人形遣いを体験してみよう」を実施したほか、「バリのワヤン人形の面白さ」と題したギャラリートークも３回（12月16日、19日、1月12日）実施した。
15	メディアデザインウィーク	デザイン	的場ひろし	メディアデザインウィーク2016では、2016年２月５日から９日までメディアデザインに関係する学生作品の展示を行い、２月６日から11日までは、専門家による講演会を実施した。学生の作品展示では、本学学生のほか、東北工業大、同志社女子大の学生の作品も展示された。学生や市民を対象とした講演会では、２月６日に氏家克典氏（音楽プロデューサー）を講師に迎えた「キーボード・奏法・音楽の進化」、７日に内田明理氏（ゲームプロデューサー／デザイナー）による「ソーシャル時代はクリエイター受難の時か？」、８日は中西元男氏（戦略デザインコンサルタント）による「デザインの教育・役割、新時代へ」（イブニングレクチャー2016春と共催）、９日には杉原厚吉氏（明治大学特任教授）を講師とした「錯視立体のデザイン」を実施した。10日には、山田卓司氏（プロモデラー）を講師に迎えた「情景の造形」、11日には「激動するコミック界、その現在・過去・未来」と題して、八巻和弘氏（小学館漫画編集者）の講演会を開催した。また、３月19日には関連イベントとして特別レクチャー「コンピュータ音楽」を開催した。

No.	イベント名	代表者		実施内容（実績報告書）
		学科	氏名	
16	海外からの来客への「月見の行事」の紹介	デザイン	花澤信太郎	10月24日、田町分器稲荷神社（浜松市中区）において学生の会場デザイン提案を基にして月見の会を実施した。イタリアから来日していた仮面即興劇コンメディア・デッラルテ劇団員の参加を想定し、紙コップで月をイメージしたオブジェや吊るすためのフレーム、その下に収穫の恵みを表す食べ物を置く台を竹で制作した。（参加者50人）

＜地域貢献・連携事業＞

本学の教育・研究の成果を公開講座やフォーラム等の開催を通じて情報発信するとともに、地域社会へ還元しています。

No.	イベント・事業名	内　　容
1	第15回　特別公開講座「薪能」（2015年10月7～8日）	第一夜　能講座　北澤秀太（能面師）、熊倉功夫（学長） 第二夜　薪能「頼政」 仕手：梅若猶彦（芸術文化学科）
2	前期公開講座「榮久庵憲司とデザインの世界」（2015年7月4日～18日・全3回）	第１回：「西洋のデザイン・日本の飾り」（熊倉功夫／学長）、シンポジウム「食文化と生活デザイン」（田嶋康正／キッコーマン㈱、熊倉功夫／学長、黒田宏治／デザイン学科、佐井国夫／デザイン学科）　第2回：「もの文化のデザイン」伊坂正人／本学名誉教授、「道具から空間へ～インダストリアルデザインとパブリックデザイン」（磯村克郎／デザイン学科） 第3回：「浜松とデザイン」（高梨廣孝／元本学教授）、「日中デザイン文化交流を振り返る」（佐井国夫／デザイン学科）
3	後期公開講座「世界情勢の現在を読み解く」（2015年10月31日～12月12日・全4回）	第1回：「国際関係の変動と地政学」（佐藤優／作家・元外務省主任分析官・本学客員教授） 第2回：「アジアの相互理解のために」（崔学松／国際文化学科）　第3回：「多様性のある創造的共同体に向かって」（崔学松／国際文化学科）　第4回：「アジア半球の時代をどう生き抜くか」（手嶋隆一／外交ジャーナリスト・作家・本学参与）
4	夏季手作り公開工房（2015年8月29～30日）	①石膏デッサンを描いてみよう（山本一樹／デザイン学科）　②銅版画を制作しよう（佐藤聖徳／デザイン学科）　③テキスタイル　手織りに挑戦！（種村 興治、桑原 壽子／外部招聘）
5	春季手作り公開工房（2016年3月19～20日）	①石膏デッサンを描いてみよう（山本一樹／デザイン学科）　②銅版画を制作しよう（佐藤聖徳／デザイン学科）　③テキスタイル　手織りに挑戦！（種村 興治、桑原 壽子／外部招聘）　④体験　デジタル・ハンディクラフト（伊豆裕一／デザイン学科）
6	文化芸術セミナー「浜松　楽器の事典　ピアノ特別編」（2015年11月13日）	シンポジウム「音楽コンクールと音楽文化～ピアノ演奏とトーク・セッション」（平野昭／本学名誉教授、上野優子／ピアニスト、小岩信治／一橋大学）
7	文化芸術セミナー「美術と音楽の西洋史～ルネサンス、バロック、新古典主義・古典派」（2015年12月1日、12月8日、12月22日）	第1回「ルネサンス」（小針由紀隆／芸術文化学科、上山典子／芸樹文化学科、植原史子／ソプラノ、水戸茂雄／リュート）　第2回「バロック」（田辺清／大東文化大学、上山典子／芸術文化学科、植原史子／ソプラノ、平山亜古／チェンバロ、西谷尚己／ヴィオラ・ダ・ガンバ）　第3回「新古典主義・古典派」（立入正之／芸術文化学科、上山典子／芸術文化学科、石井園子／ピアニスト）

＜出版助成＞

本学教員が学術研究の成果を公開するための出版について、学内公募により助成しています。

	著　　者	内　　容
1	四方田雅史（文化政策学科）	『日中比較産業史　　取引慣行と制度に見る戦前期日中経済の特質』　春風社　2016年2月
2	立入正之（芸術文化学科）	『美術史への旅　文化と芸術の再考』　インターパブリカ　2016年1月
3	黒田宏治（デザイン学科）編著 熊倉功夫（前学長・名誉教授）・田嶋康正・佐井国夫（デザイン学科）・伊坂正人（名誉教授）・磯村克郎（デザイン学科）・高梨廣孝（元教授）	『榮久庵憲司とデザインの世界』　美学出版　2016年3月

＜本学における学会開催＞

	名　　称	本学担当者
1	大正イマジュリー学会　第35回研究会（2015年7月18日）	天内大樹（デザイン学科）
2	中世文学会　平成27年度　秋季大会（2015年10月31日～11月1日）	二本松康宏（国際文化学科）

○第16回特別公開講座「ロウソク能　三輪」

第一夜　能講座　10月5日（水）　18時30分開演　静岡文化芸術大学講堂
　講師　西田かほる（国際文化学科）　受講料無料（全席自由）
第二夜　ロウソク能　10月6日（木）　18時開演　静岡文化芸術大学講堂
　狂言　和泉流／井上松次郎　ほか　　能　観世流　「三輪」／梅若猶彦　ほか
　受講料　3,000円（全席自由　高校生・本学学生無料）
　※チケットはアクトシティ浜松チケットセンター、チケットぴあ　にて購入可

○平成28年度SUAC後期公開講座「国際都市としてのパリ」

10月　8日（土）　「絵画と外国人芸術家」講師：立入正之（芸術文化学科）
10月15日（土）　「パリ国際大学都市の経緯と現状」講師：松本茂章（芸術文化学科）
10月22日（土）　「モードの都の誕生」講師：永井敦子（国際文化学科）
10月29日（土）　「エスニックシティ・パリ」講師：石川清子（国際文化学科）
【時　　間】午後１時30分～午後３時
【会　　場】静岡文化芸術大学　南棟2階281講義室
【受講資格】高校生以上
【募集定員】各講座120名（要予約・先着順）
【受 講 料】１講座：1,000円、全講座通し券（４講座分）：2,500円　　※高校生及び本学学生は受講無料
【受付期間】2016年９月９日（金）から　（定員になり次第締め切ります。）
【申込方法】電話、FAXのいずれかの方法で、お申込み下さい。
　　TEL：053-457-6105　FAX：053-457-6123（大学HPに申込フォーム有）

○静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2016

「バンドゥンからの音便り」
　インドネシア・スンダ地方の伝統音楽レクチャー&コンサート
出演　演奏：パラグナ・グループ　解説：福岡正太（国立民族学博物館准教授）
日時　10月22日（土）　会場　静岡文化芸術大学　自由創造工房
入場無料・要申込（mail：acrc@suac.ac.jp　fax：053-457-6123）

○静岡文化芸術大学　文化芸術セミナー

●「美術と音楽の西洋史　後編　全3回」
　講師：立入正之（芸術文化学科）　上山典子（芸術文化学科）
第1回　ロマン派・ロマン主義　　10月26日（水）
　ショパン／バラード第1番　リスト／≪愛の夢≫より第3番　ほか
　演奏：石井園子（ピアノ）
第2回　印象派・印象主義　　11月9日（水）
　ドビュッシー≪月の光≫　ラヴェル≪亡き王女のためのパヴァーヌ≫　ほか
　演奏：原田麻里（ピアノ）
第3回　現代美術・現代音楽　　11月16日（水）
　ベルク（米沢典剛編曲）≪抒情組曲≫　ウェーベルン（米沢典剛編曲）≪交響曲≫
　演奏：大井浩明（ピアノ）
会場　静岡文化芸術大学講堂　　開演　18時20分（開場17時50分）
入場無料・申込不要
●「浜松　楽器の事典　トランペット編」
第1章　11月24日（木）「トランペットとは？　歴史と原理」
　講師：松隈義彦（ヤマハ株式会社）
第2章　12月8日（木）　「トランペットの現在と未来　開発の現場から」
　講師：福田徳久（ヤマハ株式会社）
　演奏（第1章・2章）：菊本和昭（トランペット）　新居由佳梨（ピアノ）
会場　静岡文化芸術大学講堂　　開演　18時20分（開場17時50分）
入場無料・要申込（mail：acrc@suac.ac.jp　fax：053-457-6123）

編集後記

2016年夏の話題は、「前期公開講座」でも取り上げられたオリンピック。100年前の1916年、その年のオリンピックは中止。理由は第1次世界大戦。近代オリンピックはリオ大会まで31回、20世紀の大会は3回が戦争で中止（1916・1940・1944）。21世紀の大会はリオまで既に4回開催、2100年の第52回大会まで全25回、1度も中止とならず、日本もすべての大会に参加できるのか（日本は1980年の大会をボイコット）。BC.776～AD.393の約1200年間に293回開かれたといわれる古代オリンピックに比べれば、まだほんの短い近代オリンピックの歴史。オリンピックはスポーツ文化や競技力のみならず、政治、外交、経済、社会、科学・技術、文化・芸術すべてにわたる人類の総合力が試されている･･･。華やかなリオ大会の様子を観ながらオリンピックの過去と未来に思いを馳せた2016年夏。(St.)

Art & Culture
文化・芸術
文化・芸術研究センター ニュースレター
Vol.24
September 2016
発行人：池上重弘　編集人：冨田晋司
発　行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
（事務局　静岡文化芸術大学　地域連携室）
VEGETABLE OIL INK